

初対面異性間における対人魅力と会話行動が親密化願望に及ぼす影響

著者	仲嶺 真, 大坊 郁夫, 松井 豊
雑誌名	筑波大学心理学研究
号	46
ページ	49-56
発行年	2013-08-20
その他のタイトル	The impact of attraction and communication behaviors on the desire to become closer within pairs of opposite gender strangers
URL	http://hdl.handle.net/2241/119881

初対面異性間における対人魅力と会話行動が 親密化願望に及ぼす影響^{1,2)}

筑波大学大学院人間総合科学研究科 仲嶺 真³⁾

東京未来大学モチベーション行動科学部 大坊 郁夫

筑波大学人間系 松井 豊

The impact of attraction and communication behaviors on the desire to become closer within pairs of opposite gender strangers

Shin Nakamine (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Ibaraki 305-8572, Japan*)

Ikuo Daibo (*School of Motivation and Behavioral Sciences, Tokyo Future University, Tokyo 120-0023, Japan*)

Yutaka Matsui (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Ibaraki 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to examine whether or not interpersonal attraction at a first encounter and communication behaviors during dyadic interaction promote the desire to build a close relationship within opposite gender strangers. The participants were 60 Japanese students (30 males and 30 females), and each participant was paired with an unknown participant of the opposite gender, thus creating 30 pairs in total. They participated in two interaction sessions, which were for two minutes and ten minutes respectively. Seven kinds of behavior for each participant during the interactions were coded. The participants also completed questionnaires concerning interpersonal attraction before the interactions and degree of desire to build a close relationship after the interactions. The results indicate that attractive appearance promotes the desire to build a close relationship. This paper also discusses some advice for people who are experiencing problems related to romantic love.

Key words: interpersonal attractions, communication behaviors, close relationship, first encounter, opposite sex

問 題

- 1) 本論文の一部は、2012年日本社会心理学会第53回大会において発表されている。
- 2) 本研究は、文部科学省グローバルCOEプログラムの研究の一部である。また、分析に際して、平成22~24年度の日本学術振興会科学研究費基盤研究B(代表、大坊郁夫)の補助を受けた。
- 3) 本研究の実施にあたり、コーディングを手伝って頂いた皆様、行動データの解析をして頂いた藤田和之さん(大阪大学情報科学研究科)、実験に参加して頂いた皆様に、心より感謝申し上げます。

本研究の目的は、初対面異性が会話する状況において、会話前に異性相手に感じた魅力および会話時の行動が、会話後に相手と親密になりたいという願望に及ぼす影響について検討することである。

これまで、初対面の異性に、どのようなコミュニケーションを行えば、いい印象を与えることができるのかを検討した研究は数多くある(Fisher,

Rytting, & Heslin, 1976; Kendon & Cook, 1969; Kleinke, Bustos, Meeker, & Staneski, 1973; Kleinke, Staneski, & Berger, 1975; Kleinke, Staneski, & Pipp, 1975)。たとえば, Kendon & Cook (1969) は, 未知の男女に会話をさせ, 視線と好意度の関連を検討した結果, 頻度が少なく持続時間の長い視線が, 好意度に繋がることを示した。また, Fisher et al. (1976) は, 図書館利用者を対象に現場実験を行い, 図書館司書が本を渡す際に利用者に接触した場合の方が, 好意的に評価されることを明らかにした。

これらの研究は, 視線や身体接触などの単一チャンネルに着目したアプローチである。単一チャンネル・アプローチ研究は各々の知見の体制化には有用と捉えられている (Patterson, 1983 工藤監訳 1995) が, 単一チャンネルによる研究の蓄積が加算的に人間のコミュニケーションの実態を把握することにつながるわけではない (小川, 2011)。そのため, マルチ・チャンネル・アプローチによる研究が必要と考えられる (守崎, 2010; 横山, 2010)。

マルチ・チャンネル・アプローチによる研究も近年はいくつか行われている。たとえば, Yokoyama & Daibo (2012) では, 視線量と発話速度が, 信頼性や専門性といった印象に交互作用的影響を与えることを示した。小川 (2008) は, 言語と非言語のマルチ・チャンネル・アプローチを行い, どのような発話を行うのかとどの程度発話するのか (相手よりも多いのか, 同じくらいなのか) の組み合わせで, 相手に与える印象が異なることを示した。これらの結果は, 単一チャンネル・アプローチでは明らかにできなかった知見であり, マルチ・チャンネル・アプローチの必要性を示唆すると考えられる。

しかし, これらの研究には, いくつかの問題点もある。第一に, チャンネルを限定的にしか扱っていない点である。マルチ・チャンネル・アプローチによる研究が, 単一チャンネル・アプローチによる研究を補完し, 両研究を相互に融合させていくことで, リアルティのある対人コミュニケーションの把握を可能にする (小川, 2011) ために行われるのであれば, チャンネルの範囲をより広げる必要がある。第二に, 魅力評定や印象評定を, 相互作用後にしか行っていない点である。たとえば, Walster, Aronson, Abrahams, & Rottman (1966) は, ダンスパーティーで出会った相手と再びデートしたいかを参加者に尋ねた結果, 外見的魅力の高い人ほどデートしたいと思われていることを示した。外見的魅力は相互作用によって変動しにくく, 出会った瞬間に感じるものであると考えられる。このような性質をもつ外見的魅力が, ダンスパーティー後, すなわち, 相互作用

をした後に抱かれる印象 (Walster et al. (1966) の場合は “デートしたい”) に影響を及ぼしていた結果は, 相互作用前の魅力が重要であることを示唆するものである。また, 最初の印象が後の印象に影響を与える (Asch, 1946) ことを考えると, 相互作用前に抱いた印象によって, どのような相互作用をしても, その印象に合うように解釈され, 相互作用後の印象を決定している可能性も考えられる。

そこで, 本研究は, 上記の問題点を考慮して, 会話前に異性相手に感じた魅力および会話時の行動が, 会話後に相手と親密になりたいという願望に及ぼす影響について検討するために, 会話実験を行う。本研究で着目した会話行動は, 利き手の動き, 視線, 笑顔, うなずき, 自己開示, 発語量, 単独発話時間である。なお, 本研究で異性間の相互作用に限定したのは, 多くの青年にとって興味深い出来事である恋愛 (松井, 1990) において, 交際前にどのようにアプローチしたらいいか悩んでいる人がいる (相羽, 2011) ため, そのような青年に対して, 異性との関係構築を円滑にするための提言ができることを目指したためである。

方 法

実験計画

2011年5月に, 2人1組の会話実験を連続して2回行った。1回目は2分間, 2回目は10分間であった。会話の様子は, 実験参加者の同意の下, すべてビデオ録画されていた。また, 会話前後に質問紙への回答を求めた。実験参加者は, 関西にある国立大学の大学生および大学院生計60名 (平均年齢21.2±1.3歳) であり, 内訳は, 男性30名 (平均年齢21.3±1.2歳), 女性30名 (平均年齢21.1±1.4歳) であった。

質問紙の測度

(1) 会話相手との面識度: “初対面である”, “顔は見たことがある”, “あいさつをかわす”, “日常的な会話をする”, “個人的な問題まで話すことがある” のうち最もあてはまる選択肢を1つ選択するよう求めた。

(2) 対人魅力: 対人魅力評定尺度 (IAS: 大坊, 1982) の5因子 (“信頼性”, “外見”, “親和性”, “願望の対象”, “共同作業”) から各1項目を用いて7件法 (“ちがう” から “そう”) で尋ねた。

(3) 親密化願望: 親密化を目指して行われる行動を会話相手に行いたい程度について, 7件法 (“ちがう” から “そう”) で回答を求めた。なお, 項目は, 山根 (1987) や松井 (2000) を参考に独自で作成し, “特別な用事がなくとも電話をしたい”, “二人だけ

で食事がしたい”，“現在、付き合っている人がいるかどうか尋ねたい”の3項目であった ($\alpha = .87$)。

実験装置

実験参加者には、手首および頭部に会話行動を記録するための実験装置の装着を求めた。頭部には、SHURE のワイヤレスシステム PGX14/PG30のヘッドウォーンマイクロホンである PG30TQG を装着した。これにより取得されたデータは、発話内容、発話時間、発語量の算出の際に用いた。また、手首には、利き手の動きを測定するため、株式会社国際電気通信技術研究所 (ATR) の加速度センサ (B-Pack; WAA-006) を装着した。なお、頭部には、株式会社スパイスの3Dトラッカ (OptiTrack) を装着したが、これにより取得されたデータは、本研究には関係ないため、省略する。

手続き

事前に実験参加者の募集をし、なるべく同年齢になるように男女各1名ペアを設定した。各ペアにおける実験参加者2名と別々の場所で待ち合わせをし、実験室へと誘導した。お互いが見えないようにパーティションで区切られたブースに実験参加者2名が到着した後、実験の説明を行い、参加同意書への記入を求めた。記入後、パーティションを外し、実験参加者同士を対面させ、実験者がお互いの名字を紹介した。実験参加者が相手の顔を見たことを確認した後、パーティションを設置し、対人魅力への回答を求めた。

その後、実験参加者2名に対し、別の部屋への移動を求めた。移動後、実験装置を装着するように求めた。その後、会話は2回行われること、1回目は2分間、2回目は10分間であること、実験室内の空間を自由に移動して良いこと、お互いが仲良くなれるように自由に会話をすることを説明し、会話を開始するよう求めた。

2分経過後、会話を中断し、実験装置がうまく装着できているかどうかを確認し、2回目の会話を開始するよう求めた。

10分経過後、会話を中断し、すべての実験装置を

外すよう求め、初めの部屋へ移動するよう求めた。ブースに着席後、会話相手との面識度、親密化願望への回答を求めた。

回答後、実験の内容を他言しないことを説明し、謝礼および同意書の控えを各実験参加者に手渡し、実験終了とした。

コーディング

ビデオ録画された会話映像を用いて、“視線”、“笑顔”、“うなずき”、“発話時間”に関するコーディングを行った。データの不備により女性1名分は欠損値となった。また、ビデオ録画された会話映像を逐語記録化し、“自己開示”に関するコーディングも行った。

“視線”、“笑顔”の生起時間の算出 Microsoft 社製 Visual Basic で作成されたイベントレコーダー Sigsaji (荒川・鈴木, 2004) を用いて、第一著者と社会心理学を専攻する大学院生2名の計3名が、1指標につき2名ずつでコーディングを行った。指標の操作的定義は、Table 1に示した。

コーディングの具体的方法は次に示す通りであった。会話映像とともにイベントレコーダーをスタートさせ、対象となる行動が生起したとき、決められたキーを押した。対象となる行動が継続して生起していた場合は、キーを押し続けた。イベントレコーダーの時間的分解能は0.5sであり、1 (生起あり)、0 (生起なし) で記録された。

“うなずき”の生起頻度の算出 第一著者と社会心理学を専攻する大学生1名の計2名が、30秒ごとの生起頻度を測定した。指標の操作的定義は、Table 1に示した。

“自己開示”の算出 第一著者と発達心理学を専攻する大学生1名の計2名が、逐語記録化された実験参加者の発話内容に対し、大坊 (1992, 2002) による自己開示量の測定を目的とした発話パターンの分類項目 (Table 2) を参考に、個別にカテゴリー分けした。具体的には、“何歳ですか。”、“20歳です。”という会話のラリーがあった場合、各々の発言に対してカテゴリー分けをした (“何歳ですか。”

Table 1
視線、うなずき、笑顔の操作的定義 (木村・大坊・余語, 2010, p.17, Table 1)

行動の種類	操作的定義
視線	相手に対して視線を向けている状態。
うなずき	会話中のうなずきの動作。具体的な行動は、頭部の上下への短時間移動であり、「はい」「うん」「そうそう」などの肯定の意味を相手に伝達する場合を計測した。たとえ、頭部を下に向ける (顎を引くような動作) でも、それが長時間の場合は計測しない。短時間に複数回見られる場合、前後、上下で1回と数えて計測した。
笑顔	微笑んだり (頬, 目元, 口元から判断), 声を出して笑っている状態とした。

をTable 2のコードに従いカテゴリー分け, “20歳です。”を同様にカテゴリー分け)。

“発語量”の算出 発語量のコーディングは, 文字化した会話中の全発言を, 平仮名変換し, 各会話者の発言をMicrosoft Office Word 2007の文字カウント機能を用いて文字数を測定した。その文字数を発語量として以後の分析で用いた。

“発話時間”の算出 時定数0.5秒の設定で, 録画された会話映像に対し音声解析ソフト(Talk Analyzer ver 1.2.5)を用いて行った。この音声解析ソフトは, 音声データに対し音声の大きさの閾値を設定し, 閾値を越えたときに発話したと判断するものであった。

結 果

以下の分析は, SAS9.1 (Windows 版5.1.2600) およびMicrosoft Excel のVBA で書かれた統計分析プログラムである, HAD (清水・村山・大坊, 2006) ver.9.64を用いて行った。

コーディング結果

“視線”, “笑顔”, “うなずき”に関して, コーダー2名の一致率を算出するために, 指標ごとに, 2名のコーダーのコーディング結果のPearsonの相関係数を算出した。その結果, 比較的高い評定者間相関が得られたため (Table 3), 以後の分析ではコーダー2名の平均値を算出して分析に用いた。

“自己開示”に関しては, コーダー2名の一致率を算出するために, Kappa係数を求めたところ, その値が低かったため, 発話内容のカテゴリー分けに

関してコーダー間による話し合いを行った。その結果, Kappa係数は.80に上昇したため, この話し合いの結果の評定を採用した。以後の分析では, Table 2のコードを得点としてその合計点を自己開示の指標とし, コーダー2名の平均値を算出して分析に用いた。

“発話時間”に関しては, 発話ありと判断された回数×0.5秒をすることで, 発話時間を算出した。男性あるいは女性が単独で発話した場合を単独発話時間として分析で用いた。

会話相手との面識度

実験参加者同士が初対面であったかどうかを確認するために, 会話相手との面識度を尋ねた結果, 2組計4名は, “あいさつをかわす”関係であると回答した。本研究は, 初対面同士の会話場面に着目していたため, これら4名を分析から除外した。また, “顔は見たことがある”と回答したペアが1組いた。初対面を相互作用がない段階とし, この1組も初対面とみなし, 計28組56名を分析に含めた。

会話行動指標

実験装置およびコーディングにより得られた会話行動は, “利き手の動き (加速度)”, “笑顔”, “視線”, “うなずき”, “自己開示”, “発語量”, “単独発話時

Table 2
発話パターンの分類

コード	内容
0	質問
1	Yes / No の応答, 相手の発言の反復
3	最初の挨拶, 尋ねられたことへの応答 (事実, 同意的)
4	補足・説明する
5	自分の気持ちや考え (意見) を開陳

Table 3
視線, 笑顔, うなずきの評定者間相関

行動指標	r
視線	.95 ***
笑顔	.84 ***
うなずき	.81 ***

***p<.001

Table 4
会話行動, 対人魅力, 親密化願望の平均値および標準偏差

	n	M	SD
会話行動			
利き手の動き (m/s ²)	52	95.65	27.99
視線 (s)	56	449.58	91.89
笑顔 (s)	56	197.00	55.93
うなずき (回)	56	121.79	64.62
自己開示	56	348.45	96.43
発語量	56	2011.91	518.20
単独発話時間	56	187.57	67.43
対人魅力			
信頼性	56	3.98	1.17
外見	56	4.46	1.26
親和性	56	4.57	1.33
願望の対象	56	3.30	1.20
共同作業	56	5.45	1.01
親密化願望	56	2.88	1.22

間”の7種であった。これらの平均値はTable 4の通りであった。

これらすべての指標に対して、正規性の検定を行った。その結果，“視線”(W=.95, $p<.05$), “うなずき”(W=.94, $p<.01$)では、正規性が棄却されたため、分布の形状を勘案して対数変換を施し、分析に用いた。

会話行動と親密化願望との関連

会話前の対人魅力および会話行動が会話後の親密化願望に及ぼす影響を検討するために、会話後の親密化願望を目的変数とする階層的重回帰分析を行った。第1ステップで会話前の対人魅力評定値を、第2ステップで会話相手の会話行動を投入した。なお、対人魅力および親密化願望の平均値はTable 4に示した通りであった。階層的重回帰分析の結果、第2ステップの決定係数の変化に関しては有意ではなく、第1ステップの“外見”因子の標準偏回帰係数が有意であった(Table 5)。会話前に会話相手に外見的的魅力を感じるほど、会話後に親密になりたいと感じることが示された。また、第2ステップにおいて、“笑顔”と“自己開示”が親密化願望に影響を及ぼすことも示された。

また、性別に上記と同様の階層的重回帰分析を行った。その結果、第1ステップ、第2ステップと

Table 5
会話後の親密化願望を基準変数とした階層的重回帰分析結果

	第1ステップ	第2ステップ
	β	β
性別	-.12	-.04
対人魅力		
信頼性	.11	.10
外見	.30 *	.30 *
親和性	-.18	-.24
願望の対象	.17	.18
共同作業	.01	.10
相手の会話行動		
利き手の動き		.06
視線 ^{a)}		-.05
笑顔		.27 †
うなずき ^{a)}		-.08
自己開示		.32 †
発語量		-.09
単独発話時間		-.17
ΔR^2	.31	.12
Total R^2	.31 **	.42 *

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$

^{a)} 対数変換した値を投入した

Table 6
性別の会話後の親密化願望を基準変数とした階層的重回帰分析結果

	男性		女性	
	第1ステップ	第2ステップ	第1ステップ	第2ステップ
	β	β	β	β
対人魅力				
信頼性	.00	.17	.29	.16
外見	.48 *	.70 *	.18	.18
親和性	-.26	-.54 †	-.22	-.25
願望の対象	.13	-.11	.16	-.07
共同作業	-.05	.07	.05	.04
相手の会話行動				
利き手の動き		.70		-.26
視線 ^{a)}		.04		-.17
笑顔		-.11		.06
うなずき ^{a)}		.12		-.05
自己開示		-.24		.59 *
発語量		.07		.08
単独発話時間		.16		-.63 †
ΔR^2	.25	.21	.28	.35
Total R^2	.25	.46	.28	.62

† $p<.10$, * $p<.05$

^{a)} 対数変換した値を投入した

もに決定係数が有意ではなかったが、男女で親密化願望に影響を及ぼす要因は異なっていた (Table 6)。男性では、会話前に会話相手に外見的魅力を感じるほど、会話後の親密化願望が高くなり、女性では、会話時の会話相手の自己開示が会話後の親密化願望を高めていた。

考 察

本研究は、会話前に感じた相手への魅力および会話時の行動が、会話後に相手に抱く、親密化願望に及ぼす影響について検討するために、会話実験を行った。

階層的重回帰分析の結果から、会話前に感じた会話相手の外見的魅力の高さが、会話後の会話相手との親密化願望に影響を及ぼすことが示された。これは、Walster et al. (1966) の知見を支持するものである。すなわち、相手と親密になりたいか否かは、相手の外見的魅力に影響されやすく、会話時にどのようなコミュニケーションをするかは、あまり影響がないと考えられる。

また、変化量では有意にならなかったが、第2ステップで“笑顔”と“自己開示”が会話後の親密化願望に影響を及ぼしていた。笑顔はポジティブ感情の主要な伝達機能を担い (Andersen & Guerro, 1998)、自己開示は親和感情を反映する (大坊, 1998) ことを考慮すると、このような親密性を伝える行動をされると親密化願望が増すという返報性の現象が起きていると考えられる。相手に好意を抱ききっかけには、好意の返報性が重要な要素であり (Sprecher, 1998)、それは関係構築においても同様であることが示唆された。また、“自己開示”には、外見的魅力と同程度の影響があることも示された。笑顔は、非言語行動であり、言語行動に比して解読能力には個人差があると考えられる (大坊・高橋・磯・橋本, 2001; 落合・松井, 2009)。一方、自己開示は、言語行動であるため、解読しやすく、また、自分の情報だけでなく相手に信頼や好意も一緒に伝えている (金政・相馬・谷口, 2010) ため、親密化願望に対し相対的に大きな影響を及ぼしたのである。

性別の階層的重回帰分析の結果では、従来の知見と一致する傾向の結果がみられた。すなわち、男性は女性の外見を重視し、女性は自己開示のような内面を推察できる情報を重視するという結果 (松井, 1993) である。しかし、決定係数が有意ではなかったため、今後の詳細な検討が必要である。

本研究の問題と青年への提言

本研究の問題は、3点考えられる。第一に、参加者自身が会話相手の会話行動をどのように解釈したかは明確でない点である。本研究の結果からは、初見の外見的魅力次第で相手と親密になりかどうかが決まり、会話行動の影響はないという結果が得られた。しかし、問題で上述したように、最初の印象に合わせて会話行動を解釈した (Asch, 1946) 結果、後の親密化願望に会話行動の影響がなかった可能性はある。このような会話者の内的プロセス (他者の会話行動をどのように認知しているかなど) は、現在あまり解明されていない (小川, 2011)。上田・廻島・村門 (2010) が、相貌印象によって表情の印象が変動することを示したように、同一の会話行動でも会話前の印象によって解釈が変動することは十分に考えられる。今後は、たとえば、化粧や服装等によって印象を変化させた実験協力者と会話させ、同様の会話行動がどのように解釈されたのかを検討することも必要であろう。このような研究によって、対人コミュニケーション研究がより充実し、社会に貢献できる知見を提供可能になると考えられる。

第二に、実験参加者の少なさが挙げられる。本研究の参加者は、男女各28名であったため、信頼性をもって男女別の分析を行えなかった。男女ではコミュニケーション行動の表出や解読の程度が異なる (大坊, 2004; Hall, 1984; 菅原, 2006) ため、男女によって親密化願望に効果的な会話行動が異なる可能性は十分に考えられ、実際、その傾向を反映するような結果が示唆された。今後、実験参加者数を増やすことで性差を検討し、本研究の男女別の結果を精査していく必要がある。

第三に、測度の問題である。対人魅力の各因子を1項目で尋ねたことは、測定上の信頼性が幾分乏しいであろう。実験参加者の負担を考慮した結果ではあったが、今後は信頼性の高い測度で検討する必要があると考えられる。

本研究の結果から、恋愛においてアプローチに悩んでいる青年へ二つの提言ができると考えられる。

第一には、初対面時の印象を良くする必要性についてである。この点は従来の研究においても指摘されており (松井, 1993)、第一印象をうまく示すことが重要であろう。

第二は、会話時のコミュニケーション行動の仕方である。階層的重回帰分析の結果からは、笑顔および自己開示も親密化願望に影響を及ぼしていた。会話時は緊張や不安のせいで、笑顔になりにくく、また、自己開示もしづらい可能性はある。しかし、笑

顔や自己開示によって親密性を表出することで、相手が好意的に受け止め、対人関係の構築が円滑になるであろう。アプローチに悩む青年は、まずは“笑顔”と“自己開示”を意識することで、対人関係を円滑に構築する足がかりを得られるのではないかと考えられる。

また、この知見は、恋愛スキルトレーニングにも役立つと考えられる。相羽・松井（2013）は、社会的スキルトレーニングの一つとしての男性用恋愛スキルトレーニングプログラムを作成し、実施している。その際、どのような点を特に重視すれば良いかを本結果によって示唆できると考えられる。

このように、恋愛に悩む青年がいる以上、恋愛スキルトレーニングをしたり、その解決策を講じるための研究をしたりすることは意義のあることであると考えられ、この点において本研究は有用性があつたのではないかと考えられる。

引用文献

- 相羽美幸（2011）. 大学生の恋愛における問題状況の特徴 青年心理学研究, **23**, 19-35.
- 相羽美幸・松井 豊（2013）. 男性用恋愛スキルトレーニングプログラム作成の試み 筑波大学心理学研究, **45**, 21-31.
- Andersen, P. A., & Guerrero, L. K. (1998). *Handbook of communication and emotion*. San Diego: Academic Press.
- 荒川 歩・鈴木直人（2004）. しぐさと感情の関係の探索的研究, 感情心理学研究, **10**, 56-64.
- Asch, S. E. (1946). Forming impressions of personality. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, **41**, 258-290.
- 大坊郁夫（1982）. 異性間のコミュニケーションと対人魅力 日本社会心理学会第23回大会発表論文集, 29-30.
- 大坊郁夫（1992）. 会話事態における自己開示と対人的親密さ 日本心理学会第56回大会発表論文集, 227.
- 大坊郁夫（1998）. セレクション社会心理学14 しぐさのコミュニケーション—人は親しみをどう伝えあうか—サイエンス社
- 大坊郁夫（2002）. 会話場面における発話パターン時系列と非言語的行動との関係 第9回社会言語科学会研究大会予稿集, 188-193.
- 大坊郁夫（2004）. 親密な関係を映す対人コミュニケーション 対人社会心理学研究, **4**, 1-10.
- 大坊郁夫・高橋直樹・磯友輝子・橋本幸子（2001）. 顔面表情の表出と解釈における社会的スキルの役割 電子情報通信学会技術報告, **101**, 17-22.
- Fisher, J. D., Rytting, M., & Heslin, R. (1976). Hands touching hands: Affective and evaluative effects of interpersonal touch. *Sociometry*, **39**, 416-421.
- Hall, J. A. (1984). *Nonverbal sex difference*. Baltimore, MD: The Johns Hopkins University Press.
- 金政祐司・相馬敏彦・谷口淳一（2010）. 史上最強図解よくわかる恋愛心理学 ナツメ社
- Kendon, A., & Cook, M. (1969). The consistency of gaze patterns in social interaction. *British Journal of Psychology*, **60**, 481-494.
- 木村昌紀・大坊郁夫・余語真夫（2010）. 社会的スキルとしての対人コミュニケーション認知メカニズムの検討 社会心理学研究, **26**, 13-24.
- Kleinke, C. L., Bustos, A. A., Meeker, F. B., & Staneski, R. A. (1973). Effects of self-attributed and other-attributed gaze on inter-personal evaluations between males and females. *Journal of Experimental Social Psychology*, **9**, 154-163.
- Kleinke, C. L., Staneski, R. A., & Berger, D. E. (1975). Evaluation of an inter-viewer as a function of interviewer gaze, reinforcement of subject gaze, and interviewer attractiveness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 115-122.
- Kleinke, C. L., Staneski, R. A., & Pipp, S. L. (1975). Effects of gaze, distance, and attractiveness on males' first impression of females. *Representative Research in Social Psychology*, **6**, 7-12.
- 神山 進（1994）. 記号としての服装 木下富雄・吉田民人（編）記号と情報の行動科学 福村出版 pp.189-222.
- 松井 豊（1990）. 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, **33**, 355-370.
- 松井 豊（1993）. セレクション社会心理学12 恋ごころの科学 サイエンス社
- 松井 豊（2000）. 恋愛段階の再検討 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 92-93.
- 守崎誠一（2010）. 帰納的研究は、人のコミュニケーションを明らかにしてくれるのか—非言語研究への演繹的アプローチの必要性— 対人社会心理学研究, **10**, 72-74.
- 落合萌子・松井 豊（2009）. 他者表情が変化する場面における高対人不安者の表情認知 対人社会心理学研究, **9**, 45-53.
- 小川一美（2008）. 会話セッションの進展に伴う発

- 話の変化—Verbal Response Modesの観点から— 社会心理学研究, 23, 269-280.
- 小川一美 (2011). 対人コミュニケーションに関する実験的研究の動向と課題 教育心理学年報, 50, 187-198.
- Patterson, M. L. (1983). *Nonverbal behavior: A functional perspective*. New York: Springer-Verlag.
(バターソン, M. L. 工藤 力 (監訳) (1995). 非言語コミュニケーションの基礎理論 誠信書房)
- 清水裕士・村山 綾・大坊郁夫 (2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析 (1) —コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用— 電子情報通信学会技術研究報告, 106, 1-6.
- Sprecher, S. (1998). Insider's perspectives on reasons for attraction to a close other. *Social Psychology Quarterly*, 61, 287-300.
- 菅原健介 (2006). 恋愛における嫉妬と浮気の心理 齊藤 勇 (編) イラストレート恋愛心理学—出会いから親密な関係へ— 誠信書房 pp.94-103.
- 上田彩子・廻島和彦・村門千恵 (2010). 表情が印象判断に及ぼす影響における性差 認知心理学研究, 7, 103-112.
- Walster, E., Aronson, V., Abrahams, D., & Rottman, L. (1966). Importance of physical attractiveness in dating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 508-516.
- 山根一郎 (1987). 「恋人」という間柄を意味する諸行為の記号学的分析 社会心理学研究, 2, 29-34.
- 横山ひとみ (2010). マルチ・チャンネル・アプローチによる説得・依頼 対人社会心理学研究, 10, 56-58.
- Yokoyama, H., & Daibo, I. (2012). Effects of gaze and speech rate on receivers' evaluations of persuasive speech. *Psychological Reports*, 110, 663-676.

(受稿3月29日: 受理5月8日)